

探究的な学びを発展させる指導のあり方の研究とその成果の発信

【研究代表者】谷尻 治（和歌山大学教職大学院）

【共同研究者】貴志年秀（元和歌山大学教職大学院）

中山和幸（和歌山大学教育学部附属小学校）

中山義之（和歌山市立加太小学校、兵庫教育大学大学院）

早崎大輔、前田峻、神崎和広（和歌山市立有功東小学校）

赤松広志、藪隆政（和歌山市立雑賀小学校）

梶本久子、谷口聖人（和歌山市立楠見小学校）

中山雄一郎（和歌山市立高松小学校）

林真希（和歌山市立和佐小学校）

1. 今年度の共同研究について

『探究的な学びを発展させる指導のあり方とその成果の発信』

「総合的な学習の時間」の共同研究 5 年目にあたる今年度は、上記のテーマでこれまでの研究を一層発展させるべくスタートした。これまで我々は、探究的な学びのあり方に焦点をあてた共同研究を 4 年にわたって継続してきた。共同研究者も年々増え、それぞれの実践がより充実していることはメンバーも感じていることであった。その証左の一つに、年度末に開催している「実践発表会&石堂裕氏講演会」があげられる。

2018 年度に初めて開催した際は、石堂氏の講演のみで参加者も 30 名あまりであった。2019 年度から共同研究者の実践発表の部を新たに設けた。以後、毎年、石堂氏の講演の前に 2~3 名の実践発表を行っている。2020 年度からオンライン開催に切り替え、さらに 2021 年度には全国にも会の紹介をしたところ、上記の講演会&実践発表会には全国から 100 名を超える参加者があった。また、参加者から寄せられた感想からも十分に手応えが感じられた。このジャンルの第一人者である石堂氏からも「和歌山の総合は素晴らしい」と繰り返し称賛の言葉をいただいた。

そこで、今年度は思い切って、これまでの実践の成果を全国へ発信することを軸とした共同研究を進めることとした。即ち、「連続講座」の開催を企画したのである。これは「研究」というより、実際はテーマを設けて「実践発表」を主とするものである。全国へ向けての実践発表に向け、当然、発表者は周到な準備が必要となる。それにより、**発表者自身が自分の実践を省察的にみることができ、なおかつ俯瞰的に捉え直せる機会となる**と考えたのである。

以下に連続講座の状況を報告する。

2. 今年度の活動『和歌山発 総合学習連続講座』

年度当初に 3 回の連続講座を企画し、4 月に 2 回、8 月に 1 回実施した。連続講座の開催にあたっては、和歌山大学教育学部学校実践支援ユニットの主催とし、我々の共同研究グループが共催するという形式をとった。

（1）第 1 回連続講座

日時：4 月 9 日（土）午前 10 時~12 時。

参加者数：40 名（県外から 20 名弱の参加あり）

テーマ『総合学習って、どう進めるの？』

★講座要旨、成果と課題 講師：赤松広志先生（和歌山市立雑賀小学校）

①講座要旨

「生活科・総合的な学習の時間の魅力」と「生活科・総合で大切にしたいポイント」の二点を中心に講座を行った。生活科の魅力として直接体験を通して「子ども達の本気の姿が現れること」、体験の言語化により「言葉が豊かになること」、そして繰り返し学習材と関わる中で「学習材への愛着が深まること」を挙げた。また総合的な学習の時間の魅力としては「実社会で生きる人々との出会い」から自己

の生き方へと迫れることや現代諸課題の問題解決について行動していく中で、「ダイナミックな活動が展開されること」、その過程で「個が生きる」学習となることを挙げた。次にそのような学習を展開する上で大切にしたいポイントとして、「子どもの思い・願い」を中心に据えた「ストーリー性のある学習展開」を挙げた。そのためには、目の前の子供の興味・関心やどのような学びをしているかを知ること、知るために子供を探り続けることの重要性について話をした。

②成果と課題

成果：今回の講座を務めるにあたって、自分のこれまでの実践を振り返り、教師の立場から生活科・総合的な学習に感じる魅力を再確認することができた。その中で、これまで本グループで学んだ探究学習により身に付けることのできる生成学力が生活科・総合の時間で育まれていることを、実践の中で出てきた子ども達の姿や言葉から確かに感じる事ができた。また学習者である子どもの立場からどのような学びになることが、子ども主体の学習になるかを考え直すことができた。

課題：今回の講座では「ストーリー性のある学習展開」を挙げたが、教師目線ではなく、学習者目線からのストーリーであることは今後の自分の実践でも留意していきたい。質疑応答の時間には、「振り返り」について話題が挙がった。評価活動の重要性が高まる中で、「振り返り」について、ただ書かせるだけではなく、意図や方法を改善する必要があることが分かった。

★講座要旨、成果と課題 講師：早崎大輔先生（和歌山市立有功東小学校）

①講座要旨

「総合ってどう進めるの？」をテーマに講座を行った。講座は、①総合的な学習の時間が目指すもの②「探究的な学習」とは③探究的な学習のために大事にしていること④教材研究⑤具体的実践事例の5つの内容を柱にして進めた。①と②では、一般的なこととして学習指導要領に示されていることやこれからの学校教育に求められていること等に触れた。③では、探究的な学習にするためのポイントを4つに絞り解説した。「個を探る」、「カリキュラムマネジメント」、「人や地域との関わり」、「体験活動の位置付け」をキーワードとして、単元を作っていく視点を示した。④では、③を少し具体にして、教材研究の際に何を考えて単元づくりを進めていくかを説明した。⑤では、令和3年度の有功東小学校6年生の学習「世界一すてきな小学校をめざして」を取り上げ、これまでに話した内容を実際の子供の動きや単元の進み方と照らし合わせながら実践事例として紹介した。

②成果と課題

成果：自分の考えている「総合の進め方」を発信するために、今まで無意識に行っていたことを言葉で整理したり、「総合をどう進めているか」を客観的に見直したりする必要がある、今までと違った見方で自らの実践を振り返ることができた。例えば、探究的な学習にするためのポイントを挙げていく際に、自分が大事にしてきたことは何だったか、なぜそのポイントが大事だったのか、ということ等を考え直すことができた。全国の先生方に向けて自分の総合の話ができたという経験を積めたことも良かった。

課題：課題として2点挙げる。1つ目の課題は、話の内容を精選して、「総合をどう進めるのか？」について、もう少しポイントを絞る必要があったことである。総合の進め方についての内容と、実践紹介についての内容があり、時間内に講座を終わることができなかった。2つ目の課題は、講座で話をして、これからの実践をより探究的にする必要があると感じたことである。去年の実践を振り返って、単元中は探究のプロセスを意識しているつもりだったが、後から考えると、まとめ・表現や課題設定のフェーズで甘いところがあり、整合性がつきにくいと感じたところもあった。

★参加者の感想より

大変充実した内容でした。大満足です。和歌山大学教職大学院の先生方、このような機会を作っていただきありがとうございます。また発表していただいたお二方の先生のお陰で、遠く離れた仙台から

総合ってどう進めるの？

探究

①生活科・総合的な学習の時間の魅力

②生活科・総合で大切にしたいポイント



写真1 赤松教諭の講座『総合ってどう進めるの?』

も学ぶことができました。石堂先生からのご助言も大変参考になりました。何が大事なのかを今一度考えるきっかけとなりました。次回も楽しみにしております。ありがとうございました。

(2) 第2回連続講座

日時：4月30日(土) 午前10時～12時。

参加者数：35名(県外から15名の参加あり)

テーマ『探究テーマは、どう決める?』

★講座要旨、成果と課題 講師：中山義之先生(和歌山市立加太小学校、兵庫教育大学大学院)

①講座要旨

講座では、情報提供者2人のうちの1人として「探究テーマは、どう決める?」について話した。主な内容は、事例校がどのような小学校なのかを紹介し、そのような小学校でどのように探究テーマを決めているのかを話した。もう1人の情報提供者中山和幸先生が学習課題寄りの探究テーマ設定に関わる話を、実践者は、探究課題寄りの探究テーマ(以下、「探究課題」)設定に関わる話をした。「探究課題」設定の仕方は、「児童の実態」・「学校の実態」・「地域の実態(地域性)」, 「児童の思いや願い」それぞれのバランスを微妙に変化させながら教師が設定する。ここで令和2年度に設定した探究テーマ「地域とのつながりを深める」をもとに再度確認した。この設定に際しては、「学校の課題」、「児童の(これまでの)学習経験」を考察した「教師の願い」をもとにテーマ設定を行った。そして、コロナ禍で学校生活がスタートした「子どもの思い」から学習活動(映画制作)が決定されたことを講座のなかで報告した。

②成果と課題

成果：今回、具体的な事例を挙げて説明したことにより、講座参加者のニーズである学習課題の設定の仕方、設定した学習課題をもとに展開し新たに学習課題を設定する際の設定の仕方、「探究課題」の設定の仕方、そして設定した「探究課題」をもとに、教科横断的にどのように学習活動を展開していくのか等に対して、ある程度示唆できたのではないかと考える。これは、研究グループ内で互いに実践を共有し合い、取り組んできた成果ではないかと考えている。

課題：今後は、探究活動の各パーツをさらに精緻にしていくことができるよう。実践的研究を行う必要があると思う。私の実践をもとに1つ研究し得る課題を挙げるとすると、それは「学習評価」ではないかと考えている。この課題に対しては、まずモデルとなる評価理論を学び、それを実践で確かめるところから始めたい。

★講座要旨、成果と課題 講師：中山和幸先生(和歌山大学教育学部附属小学校)

①講座要旨

「探究テーマ」は、「探究課題」「学習課題」「学習材」など、捉え方は様々であると思うが、私は主に「学習課題」であると捉え、総合的な学習の時間における「学習課題」が成立するプロセスやその過程における教師の手立てについて自身の実践「テンくん、マンガーといっしょ(第3学年)」をもとに話をした。「学習課題」はどう決める? 私は「子どもの実態」や「社会の要請」を把握する中で「教師の願い」が生まれ、そのような「教師の願い」は「探究課題」「学習材」「学習活動」「指導事項」などを決める際に生かされると考える。しかし、「教師の願い」だけでは、子どもたちが「物事の本質に向けて探究」できるかどうか、わからない。そこで、やはり「子どもの願い」との擦り合わせが必要である。擦り合わせるために必要な教師の手立ての例として、「体験をとおして、学習材との出会いの場面をつくること」や「子どもの願いや思いから課題を設定すること」などが大切である。このような話の後、多くの質問が出された。質疑応答をとおして、「単元構想の際にどこまでを教師が決めるのか」や「子どもの探究が続くようにするにはどうすればよいのか」といったことについて参会者で協働しながら考えることができた。

②成果と課題

成果：参会者の先生方からは、「子どもの願いや問いから子ども自身に自己決定させることが探究テーマを決める上で大切であると学びました。」「体験で何を子どもたちに掴んでほしいか、感じてほしいかを指導者が明確にもっておくことも大切であると分かりました。」「児童を主語にしていかにカリキュラムマネジメントをしていくかがカギになると実感しています。本日のお二方の発表は、その点についてよく練られていてとても参考になりました。」といった感想があったことから考えると、「探究テーマを決める時に大切なこと」「そのために指導者として何ができるかといったこと」「カリキュラム

の構想」といったことについて参会者の先生方にとって学びのある学習会であった。

課題：時間の関係上、質疑・応答の時間は、講師が質問に答えるというかたちであったが、時間を確保することで、より双方向の交流の場となり、学びが深まる可能性があると考えます。

★参加者の感想より

和幸先生、義之先生、大変丁寧に教えていただきありがとうございました。体験の整理について、早めに子どもの実態を把握するために感想を書かせたり、ねらいを達成できるかキャッチしたりと、和幸先生が子供の声を本当に大事にされていることがわかりました。又、義之先生が手応えを自覚化させるときによりプロジェクトを具体的にすると達成した時の達成感が深まるというお話をされていたのを聞き、納得いたしました。本当にこのような細かい点まで質問に答えていただき、大変勉強になりました。最後に谷尻先生がまとめてくださって理解がより深まりました。貴重な時間を作っていただいたことに感謝しております。

(3) 第3回連続講座

日時：8月30日(土) 午前10時～12時。

参加者数：27名(県外から11名の参加あり)

テーマ『第一部 若者発、探究を楽しもう!』『第二部 2学期からの総合、どう進める?』

★成果と課題 講師：谷口聖人先生(和歌山市立楠見小学校)

①成果

まだ教職経験は浅いが、講師という立場で本講座に参加させていただいた。一番の成果は、講座に向けて、自分のこれまでの実践をふり返り、まとめる機会にできたことである。これまでのようにただ実践を報告するわけではなく、自分の教育理論を伝えるために手段として実践を紹介する形になった。理論と実践を共に考えるなかで、自分が大切にしていることや意識が欠けているところを確認することができた。自分自身でまとめることで、次への実践への意欲を高めることができたことはとても大きな成果である。また、若手として、さまざまなキャリア、また地域の先生と、総合を通して議論をすることができた。自分の理論と実践を土台に様々な視点から、質問や提案をいただけたので、参加者の中で誰よりも自分が学びを得たと思う。自分のこれまで、またこれからの実践の節目となった。今後も、次の節目にむけて、「残す」という意識をもって実践を続けていきたい。

②課題

今回の経験を通して、改めて「総合」にはたくさんの制約があると感じた。例えば、時間の制約。現状、総合は「1年」という限られた時間で行うしかない。学級担任制、また教員の異動などもあり、年度が変わっても、系統的に子供たちを育てていけるかという問題がある。そして、教員の熱量の問題。「総合」は、しっかりと取り組めば劇的に子供たちが変わるハイリターンなものである一方、計画や準備、時間などハイコストなものでもある。その結果、学校や教員によって熱量の差があることは明白な問題として存在する。そのため、系統的に子供たちを育てていくためには、どれだけ職員間で「総合」を共有できるかが問題になる。今までは自分の指導力をあげればよい、と思っていたが、目の前の子供を育てるためには、自分の実践を伝えて、そして他の先生の実践を受け継ぐという考えが必要だとわかった。その場・環境をどう作るのかが課題となり、その解決の一つとして、こういった研修や講座を通して、共有し合うことを大切にしたいと思った。

★成果と課題 講師：中山雄一郎先生(和歌山市立高松小学校)

①成果

昨年度の実践をふり返り、どのような見通しをもって単元を進めていたのかを自分自身フィードバックすることができた。総合的な学習の時間を行う際に、子供たちのハテナをもとに、入念に課題づくりを計画し、その課題に対して情報収集する仕方や時間の確保を自分自身改めて考えることができた。そして、課題に対してまとめた情報をクラスで交流することによって、考えを整理することができ、次の活動へスムーズにつながられるようになったことも振り返ることができた。

そして、自分自身一番力が付いたことは、他者に向けて実践をまとめ、その内容を伝達する力である。自分自身が子供たちと一緒に取り組んできた学習を、どのように説明すれば聞き手にとって伝わりやすいのかと考えながら資料をつくりあげた。一つ一つの課題が生まれるまでにどのような経緯があったのかを詳しくまとめることによって、活動の意図が今回の講座に参加していただいた方々に伝わったのではないかと感じた。

②課題

総合的な学習の時間で、自分自身単元づくりが最重要と感じている。1年間70時間の中で大単元1つを実践することを毎年計画しているため、4～5月での子供たちの興味・関心の部分での見取りがとても大切だと感じている。また、計画した単元の中で“どのような人に出会わせたいのか”や“その人と出会わせて子供たちにはどのようなことを考えてほしいのか”といった部分を事前にある程度計画することの難しさを毎年感じている。

さらに、学級総合又は学年総合のどちらで取り組むのかといった部分でも、それぞれの計画の難しさを感じている。学級総合であれば、サポートに入ってくれる教師が少なくなる点があり、学年総合であれば、クラスによって向きたい方向の違いが出た場合、各クラスの担任の力量が試されてしまうといった点である。どの教師でも総合的な学習の時間に熱意を注げられるように、今回のような講座が大切だと改めて感じた。

★成果と課題 講師：神崎和広先生（和歌山市立有功東小学校）

①成果

自身の実践を振り返り、スライドを作る中で、思考を整理・分析できた事が一番の成果だと感じている。「2学期から総合をどうはじめる？」のテーマで実践を振り返り、総合学習を進めて行く上で私が大切にしている事が、子どもの主体性を育てることだと改めて気付いたこと。また、子どもの主体性が育てば、探究の過程を下支えする、地域や社会、自己を見つめる目が育つのだと気づくことができた。また、令和日本型学校教育で求めている「個別最適な学び」「協働的な学び」と総合学習との親和性が非常に強い事も見えてきた。経験・体験を足場として単元を組んで実践していけば、子ども達は探究の過程を自ずと経験するのだと思う。単元計画が非常に重要だが、今回、発表する経験をいただき、子供を見る目、地域を見る目を磨くことができたと感じている。コロナが収まっていれば、対面とオンラインのハイブリッド型で学ぶ場があればさらに、学びが広がるのでは……と感じた。

②課題

オンラインで実践発表する事が初めてで、参加者の反応が見られないため、うまく発表できたのか……と課題に感じている。自分の動画を見直せばすぐわかると思うが、見直す勇気がでない。また、40分間も話す経験が少なく、発表の時間の配分にも課題を感じた。発表内容に関して、抽象的な内容になってしまっていたようにも感じている。今まで読んだ本から、総合学習を展開して行く上で大切だと発表者自身が感じる部分具体を要約したことが中心になっていたように感じる。具体（実践）と、理論を結び付けた内容を増やすことができれば、伝わりやすかったのかなと振り返っている。発表できるような実践があまり

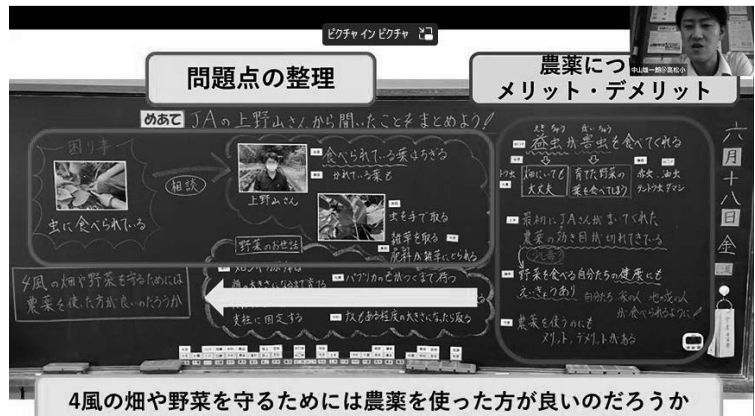


写真2 中山教諭の講座『若手発、探究を楽しもう！』

生活を綴り、語る楽しさを経験すると…

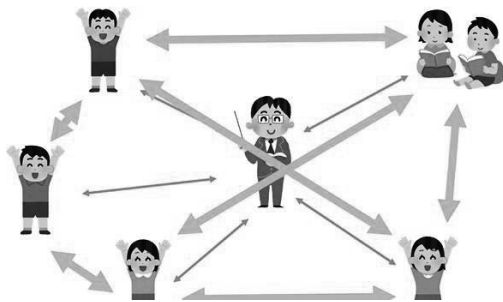


写真3 神崎教諭の講座『2学期からの総合、どう進める？』

ないことが原因かもしれない。前半の発表で、実践の紹介を行った時、探究の過程の、課題の設定、情報の収集、整理分析、まとめ表現の場面で当てはめて発表を行えば、より探究のサイクルがイメージしやすかったのかと振り返っている。発表を通して、若手の先生達から、新しい風を感じ、刺激を受けた。共に磨き合えるよう実践を積み高めていきたい。

★参加者の感想より

今回初めて総合的な学習の講座に参加させていただきました。私自身も大学で総合的な学習について勉強しておらず、いざ高学年の担任になってどうしていけばいいかととても悩んでいました。しかし、私と同世代の先生方が素晴らしい実践をされていることを知り、自分も頑張らなくてはととても刺激を受けました。まずは現任校の特色と担任する子どもたちの興味・関心をもう一度振り返りたいと思います。そして、「充実感・手応えを感じられる」「社会に参画できる」ことを念頭に、2学期から取り組んでいく学習材を収集していこうと思います。きっと失敗も多くなるとは思いますが、たくさん悩みながら前進されている実践者の姿を思い出しながら、頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

3. まとめ

共同研究者自らが、これまで実践してきたことを全国の教員に発信するという立場に立つことで、これまでの実践を整理し、さらに理論との整合性も確認しながら俯瞰的に観る力をつけることを目指して企画した連続講座であった。講師として講座を担当することは一教員にとっては相当なプレッシャーもかかるが、その立場を経験することで実践者としての力量形成が期待できる。発表者7名がまとめた成果と課題を読むと、このねらいが一定達成できたことは間違いない。

しかし、最も参加者が多くなる見込みであった第3回連続講座の日程が全国各地で様々な研修会が一斉に開催されている日と重なったため、当日は参加者が30名弱で留まったのが唯一心残りな点である。

今後、和歌山の総合的な学習が発展していくには、現状で満足せず、新たなテーマを発掘し、従来の手法に限定しない柔軟な学習方法が生み出される必要があると感じている。すでにその兆候はこの報告書にも表れている。共同研究者には更なる研鑽を重ねることが求められていることを付言しておきたい。

関連文献

- ・谷尻治、貴志年秀他、『地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実』、和歌山大学教育学部連携事業成果報告書（2018年度）
- ・谷尻治、貴志年秀他、『地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実』、和歌山大学教育学部連携事業成果報告書（2019年度）
- ・谷尻治、貴志年秀他、『3つの「学びをつなぐ」授業づくり～主体的・対話的で深い学びに向かうために～』、和歌山大学教育学部連携事業成果報告書（2020年度）
- ・谷尻治、貴志年秀他、『探究的な学びを発展させる指導のあり方』、和歌山大学教育学部連携事業成果報告書（2021年度）